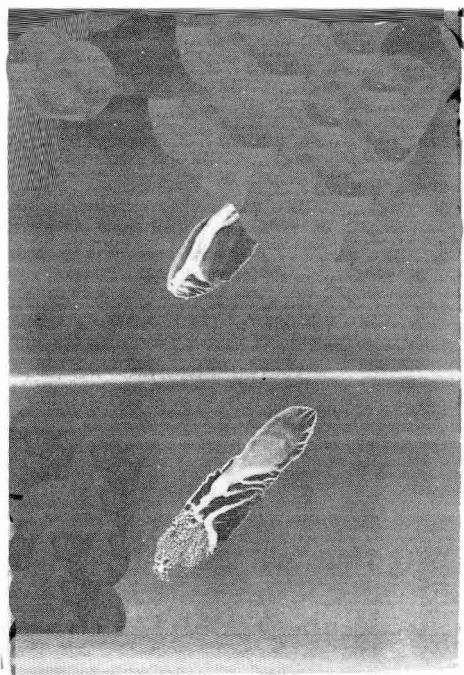


冷い夏、熱い夏

吉村 昭



新潮社版

つめた なつ あつ なつ
冷い夏、熱い夏



●著者 よしむら あきら 吉村 昭 ●発行者 佐藤亮一

●印刷所 株式会社光邦 ●製本所 加藤製本株式会社 ●発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 振替 東京4-808

電話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

●1984年7月15日発行 ●1985年2月5日4刷

定価1300円

© Akira Yoshimura, Printed in Japan 1984

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600640-5 C0393

冷い夏、
熱い夏

雨滴が小さな虫の列のように後方へ流れる窓を通して、ジェット機の主翼が、しな撓いながら揺れているのが見える。体が急に浮き上ると次には腰がはずんで座席に落ちる。機体のきしむ音が絶え間ない。十分ほど前、熊本方面が悪天候のためコースを変えて福岡空港に着陸するかも知れぬ、という機長のアナウンスがあつた。窓外は、濃霧が立ちこめているように白い。機が熊本方向に進んでいるのか、福岡空港に近づいているのかわからない。翼は柔構造になつていたので折損することは無いというが、余りにも撓い方が激しい。

私が初めて飛行機に乗つたのは、十三年前に沖繩戦を素材にした小説を書くための現地調査を終えて、那覇市から帰京する時であつた。機は、外国人乗客の多いノースアメリカン航空のジェット機で、木更津市上空にさしかかつて間もなく急に異常降下をしめし、乗客たちの間から一斉に悲鳴が起つた。全日空機、BOAC機の相つぐ墜落事故の起つた直後で、私も死を予感した。

その後、何度かそれに近い経験を味わったが、機が揺れる度に、二十歳の初秋にうけた結核の手術で辛うじて死をまぬがれた生命を、航空機事故などで失いたくはない、と思った。

しかし、雨に濡れた翼の揺れをながめているうちに、もしも墜落死するなら、それはそれで仕方がないのかも知れぬ、と妙なことを考えはじめていた。手術前には、あと五年間生きさせてもらえれば、それだけで十分だと思っていたのに、三十年余も生きつづけることができたのだから贅沢は言えぬ、という気持であつた。

死に対する恐れがある反面、諦めに似た感情をいただいたのは、体が不調であるため気弱になつているからかも知れなかつた。

体に変調をきたしたきつかけは、一カ月近く前、静岡県下に日帰り旅行をしたことであつた。かなり以前から実験動物を素材とした小説を書くことを考えていた私は、ウィルス関係の研究所に勤務する中学校時代の友人の紹介を得て、山間部に点在する飼育場の見学に赴いた。

帰途、山道で駅までのバスを待つ間、冷い富士風おろしにさらされ、帰宅後、高熱を發した。咳が激しく胸も痛み、医師の往診を請うと、感冒と気管支炎の合併症で、肺炎になるおそれもある、という。私は、横臥をつづけたが、四十度近い熱は容易にさがらず、夜は必ず汗をかき、二度も三度も寝着をかえねばならなかつた。

半月ほどすると、ようやく熱がさがり、咳も少くなつた。一週間後には九州の二都市でつづけてもよおされる出版社主催の講演会に行く予定が組まれ、落着かなかつた。同行する担当の編集者も病状を気づかってくれていたが、出発の数日前から平熱になり、咳も消えていた。

その日、私はタクシーで迎えに来た編集者と家を出、私と同じように講演を引受けた作家と羽田空港で合流し、熊本便のジェット機に乗ったのだ。

機が徐々に降下しはじめた。スチュワーデスのアナウンスが、予定通り熊本空港への着陸態勢に入ったことを告げた。リクライニングシートをもとにもどし、翼の揺れを見つめた。

三日前、思い切つて弟の家に行けばよかつた、と思つた。その前夜、弟から電話があり、暖い季節になれば胸部の痛みが消えると期待していたのに、逆に激しくなるばかりだ、と、苛立つたように言つた。

私は、嫂あなよめと五番目の兄に連絡をとり、翌日の午後、連れ立つて弟を見舞うことにきめ、それをつたえるため弟のもとに電話をかけた。受話器をとつたのは弟の妻の聲だったが、傍で寝ているらしい弟が、痛い時に来てもらつても気が重いだらうから……と言っている声がかきこえた。

それでも、翌日、タクシーを呼んで弟の家へ行こうとしたが、聲から電話がかかり、痛みが薄らいだ日に来てもらう方がいい、と弟が言っている、と告げられ、私自身も体がだるかつたのでその言葉に従つた。講演旅行を控え、出来るだけ体を休ませておきたかつた。

昨年の夏、弟が手術をうけて自宅で療養するようになってから、週に一度は見舞いに行くことを繰返していた。弟の家の近くに住む、十一年前に死亡した三兄の妻と、横浜に住む五兄と誘い合わせ、私の妻もしばしば同行した。が、一カ月前から、私のみが体の不調で足を向けることをしなくなつていた。講演旅行に出掛けるほど体調が恢復しているなら、見舞いに来てくれてもよはずだ、と弟がひそかに考えているのではないだろうか、と思つた。

禁煙のサインが灯り、車輪の脚の出るきしむような音が足もとでし、翼のフラップが伸びてゆく。雲が薄れ、下方に島原湾がひろがった。

機は、徐々に降下していった。

フロントガラスのワイパーが動き、前方を行く車に、登山帽に似た帽子をかぶった作家と編集者の後頭部がみえる。作家は、私が大学に在学中、すでに際立った文学活動をつづけていた十歳年長の方であった。過去に一度、講演旅行に同行し、私は緊張したが、中学校の先輩後輩という関係から打ちとけ、その折の記憶もあつて気分も安らいでいた。

車は、信号でしばしば停りながら雨の降る街を走って行く。道沿いの建物の間から、黒い熊本城の天守閣が見えかくれしていた。

城の濠に面した大きなホテルの前で、車が停った。私は、長身の作家の後からロビーに入り、フロントの前に立ち、宿泊カードに記入した。

カードを手にしたフロントの男が、メッセイジがあります、と言って、紙片を渡してくれた。

「伝言 (MESSAGE) と印刷された活字の下に、御自宅様より、とあり、お電話がございました、お電話下さいませ、の個所にそれぞれ丸印がつけられ、電話番号が記されていた。

部屋の鍵を手にしたボーイが、私たちの手荷物を搬送車にのせ、エレベーターに導いた。私は、部屋に入ると、すぐに受話器をとり、自宅の電話番号をまわした。

娘が電話口に出て、妻は義姉の家に行っている、と言う。私は、伝言紙に書かれた電話番号が、

義姉の家のそれであることに気づいた。

あらためてダイヤルすると、すぐに受話器をとる音がした。到着がおくれたんですね、と、妻は言った。私は、妻の声のひびきに急な用事が起った気配を感じながら、悪天候でジェット機が二十分おくれたことを口にした。

「馨さんから電話がありましてね。広志さんが痛いと言つて泣き、どこの病院でもよいから、すぐに入りたいと言つているそうです」

妻は、口早に言った。

手術前後から一度も涙など見せたことのない弟が泣いているという話に、弟の激しい苦痛と焦りを感じた。と同時に、弟の病状がすでに自宅療養の限界を越え、最後の段階に入ったのだ、とも思った。再入院すれば、弟は生きて家に帰ることはないだろう。弟の死は確定し、それまでの期間、少しでも苦痛をやわらげる処置をとってくれる病院に入れてやりたかった。

これまで医学関係の小説をいくつか書いた関係で、著名な病院に所属する数人の医師と知り合いになっている。また、私のうけた肺結核手術の執刀医であった醍醐氏は、東京大学の医学部教授を最後に定年退官し、財団法人組織の病院の名誉院長の任にあり、弟のことを氏に頼むのも一方法であった。

しかし、私は、妻に急いで森崎氏と連絡をとり指示を仰ぐようにつたえ、受話器を置いた。森崎氏は、医科大学の病理学教室の講師をつとめた後、私の家の近くに医院を開業している。弟の発病以来、私は氏に相談することが多く、氏もすすんで弟を往診してくれた関係もあって、森崎

氏なら適切な判断を下してくれる、と思つた。

私は、部屋の窓から雨に濡れた熊本城をながめながら、妻の電話を待った。

二十分近くたった頃、電話のベルが鳴り、交換手の声につづいて妻の声が流れてきた。

私が旅行中で連絡がとれぬのに苛立つた弟は、手術をうけた国立癌専門病院への入院申込みを響にさせた。病院側では、空きベッドがなく、優先的に入院できるよう手配はするが、それがいつになるか確答できぬ、と言つたという。妻が、そのこともふくめて森崎氏の指示を求めると、氏は即座に醍醐氏に一任すべきだと答えた。手術前、弟は醍醐氏の診断を仰いだこともあり、森崎氏は、私の醍醐氏に対する信頼も考慮した上で判断を下したにちがひなかつた。

妻から醍醐氏の自宅の電話番号をきいてダイヤルを廻した。幸い氏は在宅していて、おだやかな声がきこえてきた。

私が事情を述べると、

「弟さんのお宅は、どちらです」

と、氏はたずねた。

「浦和です」

「それなら、近くにある大宮市の宇津病院がよろしいでしょう。院長は、私の大学時代の二年後輩でしたが、昨春秋、病死し、長男が継いでいます。毎週水曜日に私も診療に行っていますし、優秀なスタッフが揃っています。ベッドが空いているかどうか、きいてみましょう」

氏の声は、淡々としていた。

私は、十分後、再び連絡をとらせていただくと答え、電話を切った。

時計の針の動きを眼で追い、正確に十分後に氏の家に電話をかけた。

「都合よく個室が空いていました。いつでも入院して下さい。婦長に指示しておきましたから

……」

氏は、答えた。

「念のため申し上げておきますが、弟には、むろん癌であることを告げておりません。その点、よろしく願います」

「承知しました。病院の者も、そういうことはよく心得ていますが、私からもあらためて言うておきましょう」

氏のうなづく気配がし、電話が切れた。

私は、妻に電話で病院名を告げ、すぐに弟を車で運ぶように、と言った。

受話器を置いた私は、疲労を感じ、ベッドの端に腰をおろした。旅先からの手配であったが、最良の結果が得られた、と思った。醍醐氏の関係している病院であることは、弟に信頼感と精神的な安らぎをあたえるだろうし、それに個人病院であることが好ましく思えた。

十三年前、国立癌専門病院で胃癌の手術を受けた三兄は、その後、再発して入院し死亡したが、息を引取る三十分ほど前の病院側の処置がいまわしい記憶として残っている。すでに兄は、顎の先端を突き出す下顎呼吸をしていたのに、若い技師が、看護婦とともに携帯用のX線透視検査器具を持ちこんできて、腹部の撮影をした。死を目前にしている兄に、そのような不必要と思える

検査をするのは酷であり、家族への思いやりにも欠けている、と腹立たしきをおぼえた。

病院では医学資料を出来るだけ多く蒐集しようとしているのだから、入院した弟がさまざまに検査を強いられ、それによって大きな苦痛を味わわされることは避けさせたく、個人病院で安楽に死を迎えさせてやりたかった。

その夜、妻から、弟が甥の運転する車で宇津病院に入院したことをつたえてきた。二階に寝ていた弟は、待ちきれずに甥の車が玄関についた気配がすると、階段の所まで這い出て行ったという。「痛くてがまんがでなくなっていたんですね。病院ではすぐに痛みをやわらげる注射をしてくれたそうです。馨さん、ほっとしたと言っていたわ。明日、見舞いに行つてきます」

妻は、軽く息をつくように言った。

翌日の夜、私たちは市内のホールで講演をし、次の日の朝、列車で鹿児島市に入った。雨はあがり、ホテルの部屋からは、明るく輝く錦江湾と灰色の噴煙を吐く紫色がかつた桜島が望まれた。夜、市内で再び講演をし、私に課せられた仕事は終つた。その間、何度か家に電話をして弟の様子をたずねたが、妻が見舞いに行くと、三日前から食事をとらぬ弟の顔色は別人のように青かつたが、鎮痛剤の注射をされて眠っていた、という。妻の声には、安堵しているらしい感じが感じられた。

翌日、鹿児島空港発のジェット機で帰京した。その足で弟の病院へむかおうと思つていたが、体が熱をおびていてひどくだるく、大宮まで行く気にもなれずタクシーで帰宅した。体温をはかると三十八度近くあり、身を横たえて眠つた。

弟の病変が発見されたのは、些細な偶然からであった。

昨年の七月上旬、弟から電話があつた。胃がもたれるような感じがするので、この機会に検査をしてもらおうと思ひ、近所の親しい開業医のもとで造影剤をのんで胃のX線透視をうけた。結果は異常なしであつたが、ついでに肺臓のX線透視をせうらうと、フィルムに写つた左胸部に白い影が浮び上つていた。

「ピンポン玉のような形をした影なんだよ」

弟は、ピンポン玉という言葉に声を強めた。

「なんだろうね、その影は……」

私は、首をかしげた。

「咳も痰も出ないし、医者もよくわからないから、総合病院で精密検査をうけてみたら、と言うんだ。どこかいい病院はないかね」

弟の声は、いつもと変らぬ口調であつた。

私は、年に一度胃の定期検診をしてもらっている私立医科大学病院の今西という内科教授の助手兼秘書の女性に連絡をとった。助手は、一週間後が検査日で、午前中に来院するように言い、私は、その旨を弟につたえた。

ピンポン玉という表現が、気がかりであった。私の左肺は、手術によって五分の二がつぶされ、X線透視をするとその部分が黒く写る。他の部分はきれいで、若い折の手術であったため左肺のつぶされた部分の容積だけ右肺が発達している、とも言われた。手術後、現在まで肺臓の透視フィルムを見る機会が多いが、弟の眼にもわかる影が現われているということは、その部分にかなりの異状が生じているとしか思えなかった。

弟は、ひそかに癌ではないかという不安をいだいているのだろう、と思った。家系が癌の発病と関連があるかどうか確証はないらしいが、母の系統には癌で死亡した者が多い。母は子宮癌、母の兄と弟は胃癌で、三兄の死も胃癌によるものであった。

自覚症状らしいものは全くない、と弟は言うが、癌の種類は多種多様で、兆候はさまざま形で現われ、無症状の癌もあるのかも知れない。

私は、家庭医学書を書棚からぬき出し、肺癌の部分を開いてみた。「症状」の項に、「太い気管支に発生した場合は、早期に咳が出て、痰を伴う」とあり、血痰が出ることもある、と書かれている。ついで、「肺の末梢の細い気管支に発生した場合、ごく早期には全く症状のないのが普通であるが、症状の進むにつれて胸痛があらわれたり肺炎に似た症状を伴うようになる」と、記されていた。もしも弟が肺癌であるとしたら、後者の「ごく早期」に該当し、しかも胸痛や肺炎の症

状をとまなわなないのは、癌が発生して間もない、と解釈していいのだろう。が、ピンポン玉のような大きさにまで増殖したものが早期癌の腫瘍とは考えられず、フィルムに浮び出た像は、癌組織と無縁のものとも思えた。

また、「タバコと肺ガン」という項目もあつて、肺癌の種類によつては喫煙と関係のないものもあるが、大量喫煙者に罹病率の高いことは事実だ、と書かれている。弟も喫煙はしているが、日に十本程度で、決して大量喫煙者とは言いがたかつた。

一週間後、今西教授のもとに赴いた弟が、胃はきれいだ、影のある肺臓のフィルムを胸部内科の専門医にまわすと言われた、とつたえてきた。その時も、弟の声には不安そうな気配は感じられなかつた。

しかし、翌日、電話をかけてきた弟の声は、あきらかに動揺していた。その日、胸部内科の教授に会うと、教授は、国立癌専門病院へ行つて精密検査をうけるよう指示し、紹介状を渡した。教授の態度から察して、九十九パーセント肺癌だ、と言う。

「そんなこと、わかるかよ」

私は、言つた。

「いや。だめだよ、兄さん。だめなんだよ。ピンポン玉のことについて、なにか今西先生から兄さんの所に言つてきていない？」

街頭で電話をしているらしく、車の行き交う音がしている。

「なにも言つてきてないよ」

「そうかね」

弟は、口をつぐんだ。

受話器の中から、救急車のサイレンの音がかすかにきこえている。

「それじゃ、これから帰るよ」

弟の息をつくような声があると、電話が切れた。

私は、書斎の窓から庭を見つめた。前日に草むしりをした部分だけ土の色がのぞいているが、七月も中旬に入っているのに異常に低い気温の日が近づいているので、雑草の伸びも弱い。

弟は、私が今西教授から肺癌であるという連絡をうけていると疑っているらしく、私が否定した後、少しの間口をつぐんでいた気配と電話の切り方とにそれがあらわれていた。

私は、庭に眼を向けながら自然に身構えるような気持になっていた。弟は、過去に私が三兄に對してとつた態度から、癌であることがあきらかになった場合、徹底して事実を口にするのではない、と考えているのだろう。

三兄が国立癌専門病院で胃癌の手術をうけたのは、十三年前の秋であった。半年ごとに繰返していた定期検診で発見された癌は、きわめて早期のものと診断され、病院側でも手術によって根治すると確信したらしく、兄に病名を告げた。しかし、手術後二年近くたった頃から兄は体の不調を訴え、通院していた癌専門病院での治療法が変わったこともあって、再発したらしいと口にするようになった。

当時、東京大学医学部の分院長であった醍醐教授の診断を仰ぎたい、と兄は言い出し、私も年